

# 次期学習指導要領の解説から読み解く「探究」と、データで見る学校現場の状況

これからの時代に求められる資質・能力を育む学びとして、ますますその重要性が高まる「探究学習」。しかしながら、その実践においては様々な課題を学校現場は抱えているようだ。ここでは、次期学習指導要領の解説を基に、高校教育において求められる探究学習とはどのような学びなのか改めて整理するとともに、その実践の状況や直面している問題などを調査データなどから探っていく。

## 探究とは問題解決的学習を発展的に繰り返すこと

文部科学省より2018年7月に公表された「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」によると、「問題解決的な学習が発展的に繰り返されていく」ことを「探究と呼ぶ」としている。そして探究は、生徒が、「①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見つけ、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、知識や技能に結びつけたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかにした考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見

つけ、さらなる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく」とし、「物事の本質を自己とのかかわりで探り見極めようとする一連の知的営みのこと」と定義している(図1)。

なお、①～④の探究のプロセスは固定的に捉える必要はないとされている。それは、「物事の本質を探り見極めようとする時、活動の順序が入れ替わったり、ある活動が重点的に行われたりすることは、当然起こり得ることだから」だ。

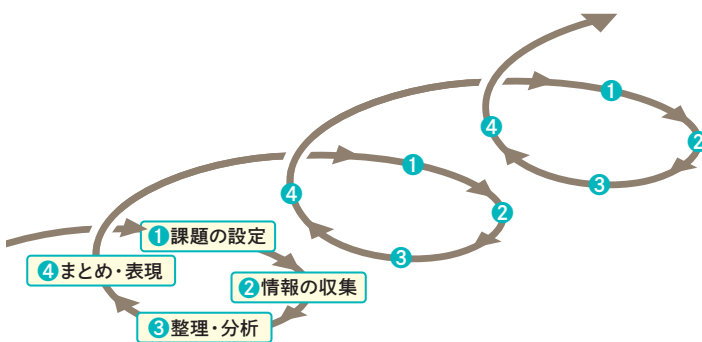
## すべての教科・科目で「探究」が展開されることが求められる

探究のプロセスが繰り返される学び(以下、ここでは原則「探究学習」

と呼ぶこととする)は、現行の「総合的な学習の時間」や次期学習指導要領で新設される「総合的な探究の時間」などでの展開が求められている。一方で、次期学習指導要領において、「総合的な探究の時間」のほかに「探究」と付された科目が複数新設される(図2)など、各教科・科目の学びにおいても「探究」が一層重視されてきて

いるが、両者の「探究」に違いはあるのだろうか。18年7月公表の文部

図1 探究における生徒の学習の姿



- 日常生活や社会に目を向け、生徒が自ら課題を設定する。
- 探究の過程を経由する。  
①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現
- 自らの考えや課題が新たに更新され、探究の過程が繰り返される。

\*文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

科学省「高等学校学習指導要領解説 総則編」では、その点について次の

ように説明している。

「(各教科・科目における「探究」は)当該教科・科目における理解をより深めることを目的とし、教科の内容項目に応じた課題に沿って探究的な活動を行うものであるのに対して、『総合的な探究の時間』や『理数探究』『理数探究基礎』は、課題を発見し解決していくために必要な資質・能力を育成することを目的とし、複数の教科・科目等の見方・考え方を組み合わせるなどして働かせ、探究のプロセスを通して資質・能力を育成するものである」

また、「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」では、「総合的な探究の時間」などで展開される探究学習が、特定の教科・科目にとどまらず、横断的・総合的な視点で実社会や実生活における複雑な文脈の中に存在する問題を対象として、そしてその問題を、複数の教科・科目等における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて、様々な角度から俯瞰して捉え、考えること、さらに生徒が取り組む課題は、解決の道筋がすぐには明らかにならない、もしくは唯一の正解が存在しないものであり、それらに対し

図2 高校の各学科に共通する各教科・科目及び総合的な探究の時間

\*赤い下線は変更のある科目

教科	科目	標準単位数	必修科目
国語	現代の国語	2	○
	言語文化	2	○
	論理国語	4	
	文学国語	4	
	国語表現	4	
	古典探究	4	
地理歴史	地理総合	2	○
	<u>地理探究</u>	3	
	歴史総合	2	○
	<u>日本史探究</u> <u>世界史探究</u>	3	
公民	公共倫理	2	○
	政治・経済	2	
		2	
数学	数学I	3	○2単位まで減可
	数学II	4	
	数学III	3	
	数学A	2	
	数学B	2	
	数学C	2	
理科	科学と人間生活	2	「科学と人間生活」を含む2科を 目または基礎を 付した科目を3 科目
	物理基礎	2	
	物理	4	
	化学基礎	2	
	化学	4	
	生物基礎	2	
	生物	4	
	地学基礎	2	
地学	4		
保健体育	体育	7~8	○
	保健	2	○
芸術	音楽I	2	○
	音楽II	2	
	音楽III	2	
	美術I	2	
	美術II	2	
	美術III	2	
	工芸I	2	
	工芸II	2	
	工芸III	2	
	書道I	2	
	書道II	2	
	書道III	2	
	外国語	英語コミュニケーションI	
英語コミュニケーションII		4	
英語コミュニケーションIII		4	
論理・表現I		2	
論理・表現II		2	
家庭	家庭基礎	2	○
	家庭総合	4	
情報	情報I	2	○
	情報II	2	
理数	<u>理数探究基礎</u>	1	
	<u>理数探究</u>	2~5	
総合的な探究の時間		3~6	○2単位まで減可

\*文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総則編」を基に編集部で作成。

て最適解や納得解を見いだすことを重視していることが、各教科・科目における「探究」と異なる点として

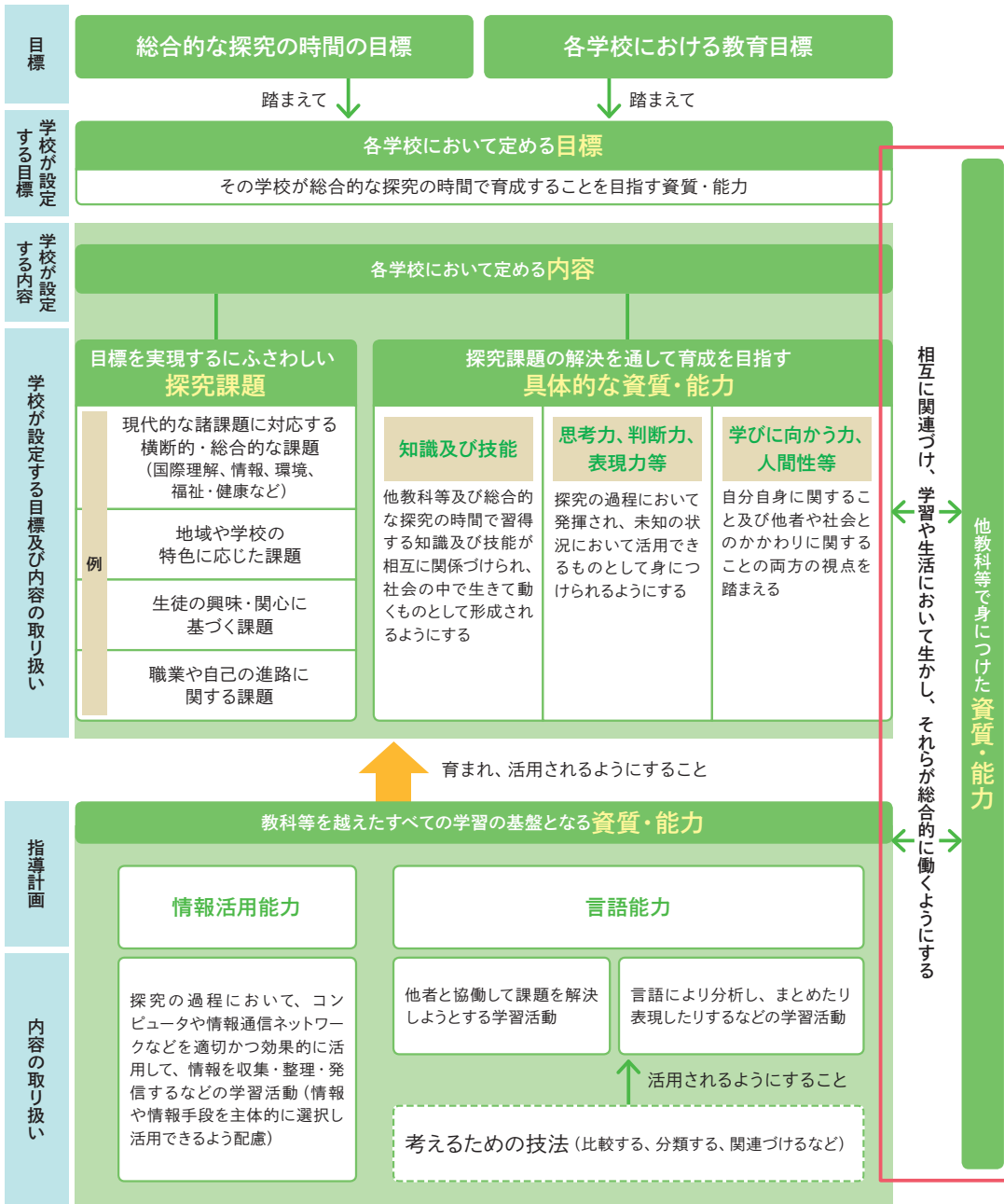
いる。以上のような違いはあるものの、押さえておきたいのは、すべての教科・科目の学びで「探究」が展開されることであり、「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」等で行われる「探究」と教科の系統の中で行われる「探究」の両方が教育課程上にしっかりと位置づけられ、それぞれを充実させることが、今後ますます求められているということである。

### 各教科・科目の学びと探究学習をつなぐ

探究的な活動を含む各教科・科目の学び、そして「総合的な学習の時間」や「総合的な探究の時間」等で行われる探究学習それぞれを充実させる一方で、両者をつなぐ視点も重要である。すなわち、各教科・科目で身につけた資質・能力と、探究学習で身につけた資質・能力を相互に関連づけ、学習や生活において生かす、それらが総合的に働くようにすることが重要である(P.6 図3)。その点を重要視する理由として、「高等学

校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」では、「身につけた資質・能力は、当初学んだ場面とは異なる新たな場面や状況で活用されることにより、一層生きて働くようになる」こと、そして、「これからの時代においてより求められる資質・能力は、既知の状況においてのみ役に立つのではなく、未知の多様な状況において自在に活用することができるものであることが求められる」としている(このことを挙げている。各教科・科目や「総合的な学習の時間」「総合的な探究の時間」等で身につけた資質・能力が、それぞれを身につけ

図3 「総合的な探究の時間」の構造イメージ



\*文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」を基に編集部で作成。

た場面とは異なる新たな場面で活用される状況をつくるためには、各教科・科目等で育む資質・能力を教師間でしっかりと把握・理解し、各教

科・科目等間での関連を図ることが必要となる。その具体例の1つとして、「高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編」では、「単

元配列表」の工夫が挙げられている。ここで言う単元配列表とは、各教科・科目等の単元の配置に加えて、相互の関連を線で結ぶことで、1年間の

流れの中で各教科・科目等との関連を見通せる年間指導計画を指す。その作成において、「単元名や学習活動だけでなく、育成を目指す資質・能力が記され、それらが相互に関連することが示されれば、それぞれの学習活動は一層充実し、資質・能力が確かに育成される」としている。そして、「総合的な探究の時間」等で行われる探究学習において、各教科・科目等で育成された資質・能力が発揮されたり、逆に探究学習で育成された資質・能力が各教科・科目等の学習活動で活用されたりといった経験を通じて、生徒が身につけた資質・能力は汎用的な資質・能力として育成されると説明している。

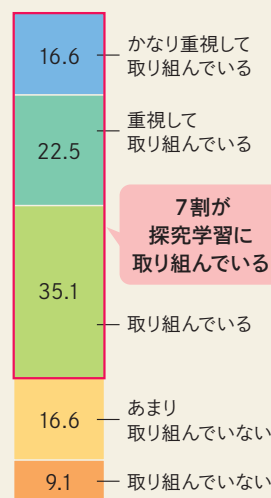
### 次期学習指導要領実施を前に 自校の「探究学習」を模索

では、学校現場における探究学習の取り組みはどのような現状なのか。「総合的な学習の時間」での探究学習の実施状況を調査したところ、多くの学校が探究学習に取り組んでいることが分かった(データ1)。しかし、その推進上の課題として、教師間の目線合わせの難しさ

## 「総合的な学習の時間」における探究学習の実施状況

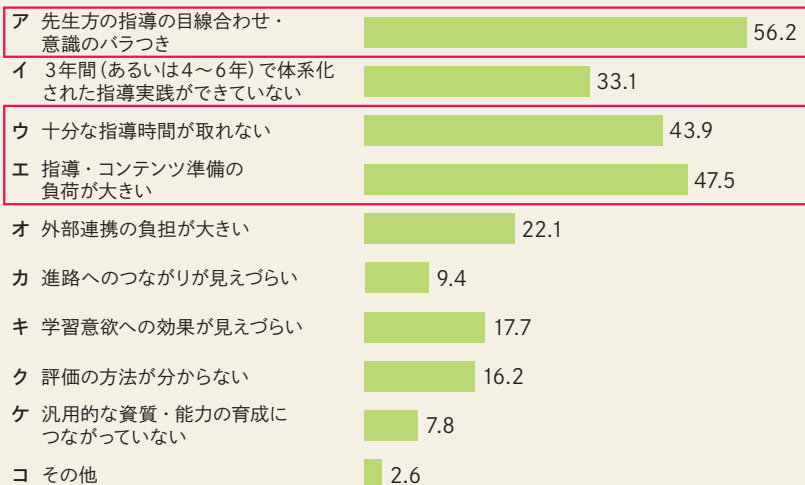
データ1

探究学習の実施状況(%)



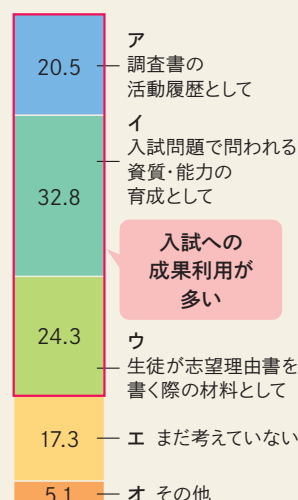
データ2

探究学習の推進上の課題 ※複数回答(%)



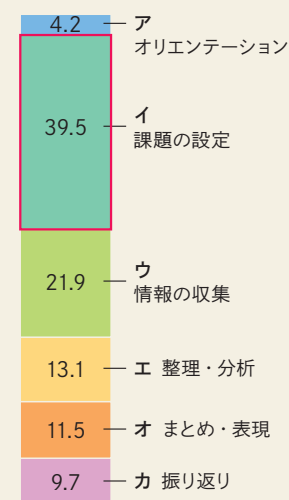
データ3

探究学習の成果利用(%)



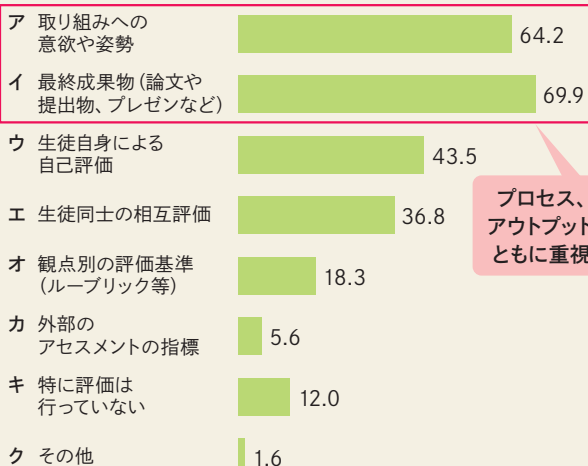
データ4

探究学習のプロセスの課題(%)



データ5

探究学習の評価で実践していること ※複数回答(%)



注) 数値は小数第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合があります。

\* 2018年6月実施「総合的な学習の時間」における探究学習の実態調査。全国の高校約1,000校へのアンケート調査結果。

などを挙げる教師が多く(データ2)、さらに、生徒に探究学習に取り組ませる上で、探究のプロセスの最初のステップである「課題の設定」に課題を感じている(データ4)。「総合的な学習の時間」における探究学習は、生徒と教師それぞれが試行錯誤をしながら取り組んでいる状態と言えるだろう。そうした中、現場の教師は、取り組みへの意欲や姿勢、最終成果物などを通じて、生徒の探究学習への取り組みをしっかりと評価し(データ5)、その結果を大学入試という生徒の未来につなげようとしている(データ3)。探究学習の何を評価し、生徒にどのようにそれを還元して、進路実現への後押しとしていくのか、各校において一貫性のある指導ストーリーを描くその重要性が、今後ますます高まっていくことだろう。「総合的な探究の時間」のみならず、各教科・科目等の学びにおける「探究」も一層求められる次期学習指導要領の実施を控え、自校の探究学習はどうあるべきか、そしてその実現に向けてどのような組織体制が必要なのか、そのヒントを次ページから探っていく。